留萌 いま・むかし

第五十六話

留萌の歓楽街

道北の一寒村にすぎない留萌にもようやく人が定着し始めると、これに吸い寄せられるかのように歓楽街も生まれつつあった。開拓の初期はほとんど男たちだけの殺風景な世界がここにはあった。しかし、漁業の進展、炭山の開発、内陸部の開拓と進むにつれその苦しさを粉らわすための歓楽街が生まれてくるのは当然のことであった。

初期の留萌の歓楽街は旧市街地（現在の港町一、二丁目）に点在していた。吉祥亭や松葉亭などがその代表である。明治二十四年から始まる新市街地の計画が進展し、官庁の指導もあって旧南山手通（現在の幸町三、四丁目通り）に移され、新廓として留萌の一大歓楽街の核となっていった。

この新廓への移転が始まったのは明治三十年代のことであり、明治三十五年の市街地の地図には新廓が登場している。移転が完了するのは明治四十年代のことである。その後新廓を中心とした歓楽街は戦後の赤線廃止にいたるまで日夜紅灯を灯しつづけたのである。

昭和のはじめ新廓地区には日勝亭、丸一楼、桃開楼、一二三楼、北越楼などの遊廓、恵比寿屋、菊屋、今新、喜楽亭、富久元などの料亭が建ち並びそのまわりにはカフェータツミ、ミニオン、カフェー太陽、第一モンパリ、ギンザ、藤美などの洋風カフェーが取り囲んでいた。

昭和四、五年頃から十五年頃までは新廓に最盛期五十名を超える芸妓が艶を競っており、その中には五郎、蘭丸、音菊などの踊りの名取り、金太は大和遠州流の教授、吉弥、綾八、一丸は三味線の名手、千代松は義太夫師匠、加留太、お鯉などの美声の持ち主など一芸に秀でた者たちがいた。遊楽館や留萌屋などで行われたこれら芸妓連の発表会ではひいき筋の声援で大いに盛り上がったと語り伝えられている。

その後戦争が激しくなるにつれ、この遊廓街も戦時色一色に塗りつぶされ、宴会等の規制も一段と強化されたことから、灯の消えたような状態が終戦まで続いた。

やっと戦争も終わり、世の中が落ち着きを見せ始めるとすぐに息を吹き返し、留萌の夜の町の主役になったが、売春禁止法や世情の移り変わりによって、歓楽街は錦町開運町方面に移り、新廓は役目を終えたのである。

留萌港遊廓之景　（弘文堂發行）（渡邊寫眞舘寫影）

Zing（ズィング）8月

表紙の説明

明治38年藤本直蔵所有の納屋で授業を開始。このころ第1簡易教育所の所属であった。明治39年奥幌糠16号に校舎を建てる。明治40年幌糠特別教授所となり、明治44年校舎改築。大正6年樽真布尋常小学校の所属、大正10年幌糠尋常小学校の所属となる。昭和10年中幌糠尋常小学校として独立。昭和22年中幌糠小学校。昭和39年校舎新築。昭和58年閉校をむかえる。

ちびっこギャラリー

お子さんの絵を募集しています。☎2-1801 内線293番までご連絡ください。

「うんどうかい」（大和田保育園）
かとう きよかちゃん（5歳・大和田町）

はるのうんどうかい、たまいれをかきました。たまいれは、しろぐみが、かちました。とっても、てんきがよかったです。